

平成30年度茅ヶ崎市バリアフリー基本構想推進協議会 第3回市民部会会議録

議題	報告 (1) 平成30年度第2回市民部会の振り返り 議題 (1) リーフレットの構成等について
日時	平成31年2月20日(水) 15:00~17:00
場所	茅ヶ崎市役所 分庁舎5階E会議室
出席者名	部会長：斉藤 進 副部会長：藤井 直人 部会員：関野 保、水島 修一、柏崎 周一、瀧井 正子、上杉 桂子、鈴木 実、瀬川 直人、牧野 浩子、浅川 晴美、杉山 徹、黒川 秀男 (欠席委員) 副部会長：海津 ゆりえ 部会員：戸井田 愛子、五十嵐 優子 (事務局) 都市部都市政策課
会議資料	・平成30年度茅ヶ崎市バリアフリー基本構想推進協議会第3回市民部会資料
会議の公開・非公開	公開
非公開の理由	
傍聴者数	なし

(会議の概要)

1. 開会

○後藤課長：定刻となりましたので、平成30年度茅ヶ崎市バリアフリー基本構想推進協議会第3回市民部会を開催いたします。本協議会は原則公開となっておりますが、本日は傍聴の方がいないため、このまま会議を進めます。

本日はお忙しい中、当本会議にご出席いただき誠にありがとうございます。司会進行を務めます、茅ヶ崎市都市政策課課長の後藤でございます。よろしくお願いいたします。

(「平成30年度茅ヶ崎市バリアフリー基本構想推進協議会第3回市民部会資料」の議題について説明)

(配布資料の説明)

本会議についてですが、部会委員16名のところ13名のご出席をいただいております。要綱第7条第6項で準用しております第6条第2項の規定により会議が成立していることを、ご報告いたします。それでは、ここからの司会進行につきましては、斉藤部会長にお願いいたします。

2. 報告

(1) 平成30年度第2回市民部会の振り返り

○斉藤部会長：それでは、部会を進めていきたいと思っております。毎回、議事録の署名人をお願いしておりますが、署名いただく委員の方は藤井委員にお願いしたいと思っております。よろしくお願いいたします。

先ほど事務局から次第の説明がありましたが、この順番で進めていきたいと思っております。まず、報告事項から説明をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○宮崎副主査：(「平成30年度茅ヶ崎市バリアフリー基本構想推進協議会第3回市民部会資料」に沿って説明。)

前回の会議を踏まえて意見をまとめましたが、事務局としては、リーフレットをいかに福祉に関心のない人に届けるか、ということテーマとして考えてきました。

しかし、我々もいつの間にか視野が狭くなっていて、「これなら届くよね」と思い込んでいた部分があったと感じています。本日の会議も、まずは市民部会として意見を改めて出し合いたいと考えています。これまで、アイメッセージを届けるということにこだわりすぎていたところもあると思っています。メッセージを届けることによる効果が大きいターゲットが決まっていなかったことや、全体のボリューム感も果たしてこれでよいのかなど、事務局として諸々反省する点があったと考えています。これまでの会議では、事務局の提案したものやリーフレットに対して意見をいただいていたのですが、市民部会というのは組織で考えて取組を進めていく、みんなで作っていくものであり、この後のアイデア出しを積極的にお願いしたいと思っています。2、3歩下がるというイメージになりますが、アイデア出しに関しては後ほどご説明いたします。

○斉藤部会長：ありがとうございます。前回、リーフレットのたたき台等を前提にしながら、皆

さんからのご意見をまとめていただきました。社会福祉協議会が中心になって、出前講座を行っていますが、一方で、リーフレットの作成や素案については色々な意見が出ています。これらをもう一度振り返っていただいて、確認、質問、ご意見があればお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

○上杉委員：前回欠席していたので分かりませんが、「年齢や性別、障害種別の情報は不要ではないか」というご意見が出たと書いてありますが、私は真逆の意見を持っています。例えば、私達は12月に市役所で自閉症の子達の作品展を実施します。そこには写真と名前、年齢、コメント等を入れて展示しています。そうすることにより、茅ヶ崎に本当に生活している人である、というリアリティを持ってもらえるので、人の目に止まります。一方、茅ヶ崎養護学校が時々市役所で作品展を実施しますが、名前がなく、ただの壁紙にしか見えなくなってしまう気がします。この部分は大事だと思います。アンケートでは、よく「仮名」として名前を出していたりするので、リアリティを出すためにこの情報は不可欠だと思いますが、いかがでしょうか。

○宮崎副主査：この意見を含めて、何が正解というのはないと思います。これからアイデア出しの時には、最初にターゲットを決めたいと思っています。それが定まることにより、ボリューム感や掲載内容が決まってくると思います。年齢や性別、障害種別ということが必要な書き方もあるでしょうし、紙面の構成にも関係してくると思います。

○斉藤部会長：全く不要とは言えないところは分かります。「誰にとって何が」というのが分からないと、意図が分からないですね。全否定ではなく、必要な情報として考えた方がよいと思います。

○柏崎委員：何故「不要」と考えたのか、どのような理由でしょうか。

○宮崎副主査：アンケートの集計を単純に書いただけのように感じてしまう、というところが一番の理由かと思います。

○柏崎委員：逆に、そのような情報が入っていた方が、生の声だと感じます。

○宮崎副主査：色々な考え方があると思います。都市政策課の中で見てもらった時、「写真を載せたほうが、よりリアリティがある」という意見があったように、人によって感じ方は当然違ってくると思います。リーフレットの目的は、いかに大きな集団に対してアプローチできるかというものであるため、部会としての考え方を固めてかたちにしたいと考えています。

○柏崎委員：上杉委員が生の声と言っていましたが、年齢、性別等の色々な情報があった方が生の声だと思います。

○黒川委員：文章が長いから余分な情報に見えるのではないのでしょうか。アンケートの結果を書いただけであり、文字の色は変えているがフォーカスしているものがないので、全体を見るとぼやけてしまっている。文字が多くページ数も多いと感じます。A4両面あるいはA3でよいと思います。そして、「茅ヶ崎感」がよく見えません。内容を変えず、言葉を選んだ方がよいと思います。また、当事者が誰なのか明確にした方がよいと思います。それは写真という方法や、言葉という方法もあると思います。リーフレットの内容自体は悪くないけれど、情報が多すぎると感じます。見せ

方の問題で、全体的にぼやけていると感じます。あまり多いと見ないし、2枚も持ちたくないですよ。1枚両面の方が分かりやすいと思います。また、土俵は茅ヶ崎だということは入れた方がよいと思います。

○上杉委員：ターゲットによっては8ページ程度のボリュームがあった方がよいかもしれませんが、街行く人に配るなら、A4より小さいサイズでもよいかもしれません。

○黒川委員：小中学生に配ると聞いたのでA4がよいと思いましたが、講義等で使うなら冊子でもよいかと思えます。

○宮崎副主査：ターゲットに渡すタイミングや使う場面によると思いますので、次の議題でターゲットについて話し合いたいと思います。

○斉藤部会長：前回会議の振り返りについて意見や質問があればお願いしたいと思います。

○藤井副部会長：出前講座は相当な回数をやっているのでも、受講者数は年数と回数を考えるとかなりの規模になると思います。小中学校、高校も含めて、子ども達が受ける影響は大きいと思います。「先生等の立場の方が障害に関心を持つことが重要である」と言うのは簡単ですが、具体的にどうやるかが、大きな問題になってくると思います。

○柏崎委員：中学校は分かりませんが、小学校には道徳の時間というものがあります。この時間では、心のバリアフリーのような題材は出てこないのでしょうか。道徳の時間がどう使われているのかわかりませんが、心のバリアフリーというのは、本当は道徳の時間の中で講義をしてもらいたいと感じます。バリアフリーは、規則や決まりではなく、マナーやエチケットだと思いますので、小学生の頃から道徳の時間に取り上げてもらえるとうよいと思います。

○斉藤部会長：学校から社協にお願いされる時は、どうかたちが多いのですか。

○水島委員：ご質問とはずれてしまうかもしれませんが、資料に書いてあることに補足しますと、小学校はかなりの学校が実施していますが、実施しない学校もあります。前年に実施していると、繰り返し実施していただける所もあります。中学校も似たような傾向がありますが、校長会等において「こういうメニューをやっているのでも、是非、周知をしてください。」という依頼が一番多いです。なるべく全校でやっていただきたいという気持ちがありますが、1年おきでもよいのでやってほしいと思っています。

子ども達を中心に受講するのですが、本来は大人の方が肝心なのかと思えます。何十年と続けてきている事業ですし、大きく変わっていくものでもありません。継続していくことの大切さは感じています。変わってこないということは、一旦終わってしまうと、いつの間にか意識から外れていってしまう、忘れてしまうということなので、大人に対してどこかでできないかと思えます。また、ボランティア的に協力を得ながらやっている事業ですので、どうしても限界があります。

もう一つ、福祉関係が学校で大切だというのは共通認識です。ただ、防災や安全など、様々なものがあり、こなさきれていないと感じます。優先度を考えた中で、バリアフリーは下とは言いませんが、なかなか上がってこない学校もあるように感じます。

○藤井副部会長：先生方が使える教材を社協さんの方でためておいて、先生が利用しやすいよう

なシステムというの必要なのかなと思いました。

○水島委員：同じ福祉教育のメニューでも、講義や先生方によって、対応の仕方も感じ方も全く違うので、一律にするのは難しいと思います。

○藤井副部長：今度作るリーフレットを配布できるようにするなど、次の話題になってしまいますが、そういう視点もあるかと思いました。

○水島委員：高校の先生が福祉教育の関係で研修に来られると、その経験で結構色々な事を実施しています。募金活動等の福祉活動に生徒を連れて来られたり、ここ数年増えてきています。何らかのかたちで、できることを少しずつ、先生も含めて参加してきていることが増えてきているので、やはり、先生方に意識を持ってもらうことが、継続的に長く続ける上で大切なのかと思います。

○杉山委員：私は、以前横浜の方で活動をしていたのですが、その時はホテル専門学校に障害当事者を連れて行きました。専門学校のホテル科の学生は、卒業するとすぐホテルで働くので、そのまま実践に使えるということで、卒業した生徒から「やってもらってよかった」という声を聞いたことがあります。直接自分の仕事に後で跳ね返るというイメージで考えると、実際に大人になる直前や新入社員やサービス業の方など、そういった人達の方がよいのではないかと思います。茅ヶ崎の場合、どの程度なのかはわかりませんが、すぐ役に立って、本人が結果的に良かったというような効果は考えられないのかと思います。

小学生について、聞いた話では熱心な小学校の先生が転勤すると、次の学校でもやることにより、広がっていくようです。逆に出ていった学校の次の先生がやっているかどうかは分かりません。

○斉藤部長：3ページの「出前授業において、子どもから素朴な質問を受けることが～」とありますが、この「ちょっとした疑問」や「素朴な質問」というのは、どういうものなのか、何か情報はありますか。この辺は大きな取っ掛かりになるのではないかと思います。子ども達が思う素朴な質問や疑問、具体的に思っていること、感じていることなど、それをリーフレットにどのような姿で活用していくのか、ということが考えられます。色々なところで意見を聞きますが、実態はどうなのかと掘り下げていくと、色々伝えることが出てくると思います。今の社会人や専門学生達もそうですが、最近では、金融機関等でも出前講座をやっている例もあると書いてあります。茅ヶ崎ではどのようなものがよいのか、というものが見えてくるかと思えます。

○鈴木委員：ちょっとした疑問のことですが、前回も少しお話しましたが、小学校4年生ぐらいの子どもをターゲットとして、我々は学校に行って話をします。そこで本当に些細なことを聞かれます。「食事はどうしていますか」「目が見えないのに食事できるのですか」「お風呂はどうしていますか」「お金はどうやって見分けるのですか」など、子どもでなければ思いつかないような簡単な疑問を投げかけてきます。

○斉藤部長：そういう分かりやすさというか、気付きの原点のようなものが、難しい事をダラダラと述べるよりも、多くの人には共感を呼ぶと思います。

○鈴木委員：子どもにとってみると、本当に単純な疑問であると思います。

我々視覚障害の出前講座では、2～4時間ほど必要となります。それが、障害区分がいくつあるのかと考えると、全体として、1年間のカリキュラムの中でできるのでしょうか。今やっている中では、肢体障害と聴覚と視覚が多く行ってやっているようですが、それ以外にも障害はたくさんあります。そういうものを子ども達に教える場合に、1回20～30分話ただけで理解するのは難しいと思います。少なくとも2時間程度、そのぐらい取らなくてはいけないとなると、10コマ分くらいになってしまうのではないのでしょうか。それを学校の方で対応できるかということも問題になってくると思います。

○斉藤部会長：全ての障害をテーマにしたカリキュラムを実施する学校はほとんどないと思います。肢体なら肢体、視覚なら視覚と、限られた時間の中でやっているのが現実だと思います。ただし、私の知っている範囲で言えば、例えば、1日ではなく年間をとおしてやるということを頑張っている学校はあります。1回1コマの45分や2コマの90分での理解というのは、絶対とは言いませんが一瞬で忘れてしまうものです。ある学校は1年間を前、中、後で分けて、とおして全部実施しています。1年間やっているためものすごく学習効果が高いです。1回1コマでやるというよりも、継続してできる方が有効かもしれません。

それから、学校において1日車いすで生活を送らせるというものがあります。子ども達がグループに分かれて、1日車いすに乗る。車いすに乗って、友達がその子の色々な移動や世話をするといったように、日常生活の中で実体験や学習ができます。

学校現場は本当に忙しいと思います。福祉だけをやっているわけではなく、あらゆるカリキュラムがどんどん増えてきて、飽和状態だと思います。その中で、この福祉というものをどう取り上げようかとすると、アイデアを出していかないと難しく感じます。連続したもの、あるいは学校側で事あるごとに気付いてやってもらうということもあるのかもしれません。

○関野委員：「障害の理解」というのは、どこまで理解することを考えているのか。私を感じるのは、障害を持たれる方が表に出ることが多くなっていると思います。目にする機会が多くなって、「世の中こういう人がいるんだな」「こういう困った人がいるんだな」という認識を持っている人が多いと思っています。昔は、障害者は外に出てこないために分からなかった。そういう意味では、障害者が不便さを感じるのは障害の理解が足りないからだ、と思われている部分がどのくらいあるのかと思います。私は、分かっているけれどパッと何かができない。こちらがネックなのであって、決して障害を理解できていないからではないと思っています。障害をお持ちの方が本当に理解されていないから、してもらいたいことがされないと感じる事は実際あるのでしょうか。

○藤井副部会長：私の経験から言いますと、リハビリテーション工学ということで福祉機器の研究開発をやっていますが、その立場で障害者・高齢者の外出についての研究をやってきました。例えば、低床バスの導入初期のころは、あのバスは高額だが障害者が乗り降りするから仕方がない、という印象でしたが、10年程経過した現在、学生

に聞いてみると、あのバスは別に障害者用のバスとは思っていない。みなさんも、バスと言えば低床バスで、乗りやすいのは当然だと思っています。2000年にバリアフリー法が始まって、障害者の方々も公共交通を使えるようにしましょう、ということで立ち上げています。ところが、それが今は常識になっています。社会の動きとしては、障害者を前面に出さなければ動いていけないということがあります。障害の理解と言っていますが、むしろここは交通バリアフリー法からきています。今、車いすの方々が乗れるようなバスやタクシーというものが出始めました。それでも、外出は簡単なことではありませんが、知的障害者のような外見的には障害者に見えないような方を出やすくするためにはどうしたらよいか、という段階に移りつつあります。今言われているように、障害者が多く目につくようになってきたことには、前提として社会環境づくりがずっと進んできたために、障害者が外出できるようになり、皆さんも障害者や高齢者の方々を見かけるようになった。色々な人がいることが分かってきたけれども、どう対応したらよいか、というのが次の段階になると思います。障害の見えない方に対してもどう対応したらよいか、外出するにはどういう環境が必要なのか、というのが次の段階なのではないでしょうか。

○斉藤部会長：そういう話も考えながら進めていかなければいけないですね。

○柏崎委員：老人クラブにおいても、大学の先生が来て講義をします。講師の方は、あれもこれもと色々教えたいのですが、聞いている方にはほとんど伝わっていません。私は、3つを繰り返し言っていたらいいですよ、という言い方を先生にしています。講師という立場ですから、フルに情報を提供しようとする傾向にあります。良いと思っていても受ける方からすると頭が満杯になってしまい、何も頭に入らないという悪い状態になってしまいます。おっしゃられているように、時間が制限されている中では、出前講座も大きく3つくらいを重点に言っていただいて、それで色々な障害の種類の違いの違うものを話すというようにした方がよい、と講座を受けている立場としては感じています。

○瀬川委員：今の話とずれていなければよいですが、今回のリーフレットの目的は導入部分だと思っています。やはり色々な声を載せるのは良いと思っており、年齢も障害種別も載せてよいと思いますが、それだけで「〇〇障害はこういうものなのか」というように理解してもらうことはとても難しいため、これで何を言いたいのかということを経ると、多様性を認めることであると思います。それぐらい絞って、じゃあ多様性とは何か、と考えた時に、勉強できる子がいれば運動神経の良い子、悪い子もいる。この中に障害を持って不便な人がいる、という風に広げていけるとと思います。通年の話もありましたが、このことを通年でやっていこう、という考え方でよいのではないかと思います。お話にあったように、盛り込みすぎると効果は逆に薄れるのだらうなと思います。

○上杉委員：先ほど斉藤部会長の発言に「学校現場ではやる事が多くて、優先順位を付けざるを得なくて後の方になってしまう可能性がある」という話がありましたが、現在学校で最優先にされているものは何なのでしょう。

○斉藤部会長：小学校の先生じゃないと分かりませんが、私が校長なら人権教育だと思います。

○上杉委員：何が言いたいのかというと、おそらく子どもの現在や将来にとって、得ておかないと困るのが最優先だと思います。そのように考えると、障害というのは後の方になってしまいます。知っていても知らなくても特に問題はない、自分達の暮らしに影響はない、ということだと思います。瀬川さんがおっしゃったことに繋がるのですが、私や瀧井さんが社会福祉協議会で啓発隊をやる時に、「崇高な理念で障害のある人を助けなきゃいけない、というものだけだと弱いよね」という話をしました。そういう崇高な理念や優しくしてあげよう、親切にしてあげよう、というのは、自分に余裕がある時はやるけれど、そうでない時は「ちょっと申し訳ないけど今は勘弁」ということになりませんが、そこを強めたいと考えています。

牧野委員は知っていると思いますが、インターネットで「世の中の動物はみんな弱肉強食なのに、なぜ人間だけはそうじゃないのか」という質問がありました。それに対するベストアンサーは「生物界は弱肉強食ではなく、適者生存である」というものでした。その意味は、力や体の大きさなど、強い人が勝ってしまう世の中であれば、人間なんているはずがないが、今は最高位にいる。ということは、人間が世の中で適者としてトップに君臨する要因があったということです。それは何かというと「共生」だと書いてありました。弱い者も強い者も、種族として一緒に生きてきたから強い、一緒に生きていかなければ生き残れない動物であるということから、障害のある人もひっくるめて、守っていかないと人間そのものが生きていけないのだ、というような内容がベストアンサーでした。

○牧野委員：私はまた少し違うことを考えていました。ダイアログ・イン・ザ・ダークというイベントは、電気を全て消して、真っ暗な所で視覚障害者が健常者を先導して、その中でイベントをするというものです。そこで、本当に真っ暗で光が一つもない空間では、健常者の方が不利で、視覚障害者が有利です。視覚障害者はその空間の中で自由に動けるけど、健常者はそこでは上手く動けない。環境によって立場が逆転するわけです。今、私達が生きている社会は、普通のいわゆる健常者に有利な社会であり、たまたま車いすの人や視覚障害や聴覚障害の人が「障害者」と言われているけれど、環境が反転してしまえば、健常者が不利になる。おそらく適者生存というのは、色々な環境になった時に、色々な多様性を許しておくことで、今後人類として社会的にもっと発展できるだろうというのが、そのベストアンサーの答えだと思いました。

○上杉委員：そうですね。障害のある人もない人も、困窮している人も全てひっくるめて助け合っていないとあなたは生きていけない、というような意識ですね。

○牧野委員：私もこのリーフレットを作るのに、困っている人を助けてあげようね、という理念ではなく、色々な立場の人がいて、たまたま今、社会は健常者に有利な環境になっているが、そうじゃない環境さえ作れば障害者の人だって同じように暮らせる、というような視点が欲しいと思っています。伝えるのは難しいのかもしれませんが、階段がなければ車いすの人だって障害者じゃないし、低床バスの話もありましたが、階段のあるバスには乗れないが低床バスであれば車いすでも乗れる。それは環境の問題である、という視点を入れたいと考えていました。

- 齊藤部会長：それは共通の理解として、「誰にとっても」ということだと思いました。誰にとっても使いやすいという発想が基本的には前提なのでしょうね。
- 牧野委員：今まで気づかずに健常者として使っていたけど、実はこういう立場の人にはとても使いにくいのだな、分かりにくいのだな、こうすればみんな分かるのだな、ということ啓発するリーフレットであって欲しいと思っています。
- 齊藤部会長：立場や状況の違いを理解して考えられるような資料ですね。
- 牧野委員：どうやったらよいのか、という具体的なアイデアは思いつきませんが、色々な視点を分かってもらえるようなリーフレットにしたいと思います。
- 上杉委員：私の言っていることは牧野委員とは異なり、どちらも大事だと思いますが、まず、助け合わなければいけないということを出して、その後に、そうすればみんなが便利だよ、というものを出していく段階です。
- 牧野委員：健常者として普通に生きていくと、健常者の方が普通に生きていて、障害者の人がちょっと足りなくて大変、という視点になるので、その視点を変えたいと思います。
- 齊藤部会長：先ほど、藤井委員が言われていたのがまさにそういうことです。最初は「その人」のために、それが当たり前になって、みんなのためになっています。
- 牧野委員：「その人」を助けたいのではなくて、結局、それが自分のためにもなるということです。

3. 議題

(1) リーフレットの構成等について

- 宮崎副主査：（「平成30年度茅ヶ崎市バリアフリー基本構想推進協議会第3回市民部会資料」に沿って説明。）
- 齊藤部会長：事務局としての方針はそうかもしれませんが、①～④の順番で行くとは限らないと思います。多様性や共生など、話し合っていた結果、ここがターゲットではないか、こういうページのレイアウトではないか、となるのではないのでしょうか。必ずしも①からではなく、①～④を念頭に置きながら、思いついた事を自由に出してもらった方がよいのではないのでしょうか。
- 上杉委員：私はターゲットが決まらないと、②以降が決まらないと思います。ターゲットが決まれば、それを意識しながら数珠つなぎで考えられるのですが、ターゲットの時点でバラバラになっていると、どれも繋げなくてはいけなくなると思います。
- 齊藤部会長：上杉さんなら、ターゲットは誰になりますか。
- 上杉委員：市民の中のオピニオンリーダー的な方です。地域から一目置かれていて尊敬されているような人達です。オピニオンリーダーの方が理解をして適切な対応をしてくださると、自分達もやろうという気になるのではないのかなと思います。
- 齊藤部会長：民生委員とかですか。
- 上杉委員：そうですね。
- 黒川委員：茅ヶ崎市バリアフリー基本構想に心のバリアフリーのコラムがありましたが、それ以外にも色々あります。その中に、平成26年にアンケートの結果がありますが、これは続けているんですか。

- 宮崎副主査：それはその冊子を作る時のためにやったものです。
- 黒川委員：この時はターゲットを決めてたんですか。
- 宮崎副主査：決めていません。そのアンケートはあくまでもその計画を作るためのものです。
- 黒川委員：やった事に対して反復しながら、何が足らなかったか、何が有効だったか、という結果が出ていれば、次のステップが少しは見えてくるかもしれません。
- 当時は平成26年で、あれから5年経っています。5年の間に、小学生が中学生に、社会人1年生が5年生になります。専門学校の学生に対してと小学生低学年に対しての教え方は違いますよね。だから、ターゲットは複数だと思います。様々なターゲットに向けたリーフレットを複数作ってもよいのではないかと思います。
- 守瀬課長補佐：良いと思いますが、同時に全部作るのは難しいかなと思います。
- 黒川委員：この会議でみんなの意見を聞いていると、多分、ターゲットも含めて答えは出ないと思います。だとしたら、前にやった事を見直しながらやれば、気付きになると思います。先ほどの「共生」や「多様性」はキーワードで、その辺りを含めたらターゲットは複数だと思います。
- 上杉委員：どこを入口にするかですよね。
- 黒川委員：そうですね。目の前の2年ではなく、継続的に続けていく方法を考えたらよいと思います。
- 宮崎副主査：今はロードマップがなく、まずはリーフレットというツールを使ってスタートラインに立ってみようという状況です。
- 柏崎委員：心のバリアフリーは非常に難しいものです。会議に出席している中で、計画を立てて進めていくというよりも、一つずつ取組を進めていくものであると感じています。これまで何もやってきていないわけではないと思います。
- 鈴木委員：ターゲットということ言うと、我々は去年、小和田公民館から町内会でサウンドテーブルテニスの指導をお願いされました。視覚障害者が何人か行って、向こうは松浪地区の町内会の方が50～100人くらいフリーに来ていただいて、その方々を何班かに分けてやり方を教えました。時間の3分の2くらいはサウンドテーブルテニスをして、その後みんなでゲームをしましょうということになりました。視覚障害者もグループの中に入ってじゃんけんをしましょうと。そこで、視覚障害者はどうやったらみんなと一緒にゲームができるのか、じゃんけんをするには自分で言えばよいと。そうすれば視覚障害者も健常者も一緒にゲームができるということでした。町内会ですと、親子連れで来たり、おじいちゃんおばあちゃんが来たり、年齢層がすごく広いです。そういう所で今回のリーフレットをテキストのような形にして配ったら、町内ごとに理解が広まっていくのではないかと思います。
- 斉藤部会長：それは成人ですか、子どもですか。
- 鈴木委員：子ども、成人含めてですね。上ですと80歳以上の方もいました。
- 斉藤部会長：一般市民向けのテキスト的なものでもよいのでは、ということですね。
- 上杉委員：単純に渡すだけではなくて、当事者の方がいる場で配って、生の声がセットだとよいのかと思いました。そうすると配られる方はかなり限定されてしまうかもしれませんが。

○杉山委員：前回、予算は1万部と言っていましたか。そうすると、配布する範囲は限定しなければいけないかと思います。また、読まないということを前提にすると、講座や交流会を開いて、その中で渡していくやり方をしていけないかかと思っています。リーフレットを生かす方法としては、テキストをオピニオンリーダーに配るなど、そういう使い方もできるパンフレットでもよいと思います。

○守瀬課長補佐：どうしても行政的な事情で作らなくてはいけないというものでもないので、予算はもちろんありますが、だからといって精度の低いものを作っても意味がないかと思っています。「これ以上のお金を出せ」というのは難しいですが、例えば、紙じゃなくても、若い方ならインターネットに載せていけば勝手に自分で見に来るということもありますので、そういう対応もできるかかと思っています。

前回お話したものは、どうしてもボリュームが多くて読むことを強制するような内容になってしまっていたかという反省もあります。100段階ある内の1段階目だけでも関心を持ってもらえれば、最近の若い方はスマートフォンを使用して自分で調べたりするということもあるので、入口くらいのレベルの低さでもよいのかかとも思います。我々で考えているだけでは結論が出なかったので、ぜひ皆さんの意見をお聞きしたいと思います。

○斉藤部会長：今の杉山さんが言ったことは一番大事だと思います。今までは「作る」ということが目的でした。それではなく、生かすことが重要です。作ることばかり一生懸命にやって、その後を考えていませんでした。だから、積んであるだけ、読まないでおいてあるだけなんですね。リーフレットを作ってどう読ませるのか。フィードバックすると、読ませるためにはどんな内容がいいのか、ということになります。理解してもらえば、私は直接対話でないと駄目だと思います。一緒にやるから理解するんですよ。スマートフォンという情報だけだと、目では読んでいるかもしれませんが、体は感じてないかと思っています。イベントがあったら配って、説明をする。そこで初めて相互理解があると私は思います。どうすれば読んでいただけるのか、どういう内容を企画したらよいのかなど、考えてほしいかと思っています。そうするとターゲットも見えてくるかと思っています。リーダーがよいのか、一般市民がよいのか、子どもがよいのか。全部必要だけど、今は優先的にどこがよいのか。特定のターゲットを決めると、それ以外の対象をどうするのか。これはシリーズのようにして、順次対応するほうがよいかと思っています。

さらには、できれば自分達で作ると。このリーフレットは、行政に任せる仕事ではないかと思っています。そういう意味で部会としてやっているのか、自分達で作って、印刷は行政に任せるといような関係に切り替えていくべきかかと思っています。「多様性」と「共生」のイメージをどう盛り込めばよいのか。難しく考えずにどんどん意見を出していただければ、まとまってくるのではないかかと思っています。

○上杉委員：顔は欲しいですよ。当事者の顔もよいですが、例えば、茅ヶ崎の著名人の顔やえぼし麻呂など。知っている人が載っていると見てしまうかかと思っています。「僕と障害者とのエピソード」なんかがあると、みんな読むかかと思っています。

○牧野委員：先ほど、性別や年齢に関する意見がありましたけど、その意見というのは新聞の匿

名アンケートのような感じで、名前がなくて「〇〇代 女性」とか書いてあると、リアル感がないというか。本当にそこで生きていて暮らしている人の本当の困っている感じを、もう少しアピールしたいです。

○上杉委員：何か「顔」を入れるかたちで、少しメリハリがほしいですね。

○牧野委員：そういうのは面白いかもしれないですね。例えば、車いすの人の1日を追いました、という方が、その人の気持ちになって困っていることが想像しやすいと思います。

○上杉委員：「言葉」ですが、他の委員会でも少し言ったのですが、私がチラシやポスターを作る時に参考にするのが、電車の中吊り広告です。ああいうものは紙面が限られていて、パッと目につかないといけなから、わりとキャッチーな言葉がバンときます。

○牧野委員：1枚もののチラシのようなものと、テキストのようなものは別に考えた方がよいかなと思います。例えば、学校に持って行って生徒に説明する時やイベントで説明する時は、テキストのように何ページかあったもので、通りすがりの人に配るものはチラシがよいと思います。ストーリーがないと感情移入できないので、誰かの1日を追うのはよいと思いました。

○藤井副部長：過去のアンケートにおいて、茅ヶ崎のお祭りや行事に「ぜひ参加したい」という声がありました。例えば、花火大会なら茅ヶ崎の人はほとんど知っているの、市民には共通の認識があります。その共通理解が受け入れられるようなシチュエーションにおいて、障害者がどうだったのか、と投げかける。こういう障害者がいるけど、その人達も楽しんでいる、というような部分がパンフレットで出ていたら読んでくれるかな、と思いました。

○牧野委員：花火大会について、どんな事に困ったか、聞いてくれればいくらでも喋ります。

○斉藤部長：1番は思ったところに行けなかったことですか。

○牧野委員：どこに行くにしてもまずトイレを調べます。あと、いつも通っている道が通れなかったりとかは困りますね。

○上杉委員：施設にいる人は行けないですね。職員が連れて行ってくれないためです。一人でどこかに行けない人にとっては、喫茶店でお茶を飲むことが夢に見るような話のようです。

○斉藤部長：例えば、誰かの1日について、楽しかったこと、困ったことを出していくのはよいかもしれませんね。そういうことをより汎用性を持たせて考えていく。これをどのようにうまく構成していくのか、でしょうね。

○杉山委員：リーフレットは、作成までの時間は限られているのですか。

○宮崎副主査：時間は限られていません。中途半端なものは作りたくないと考えています。

○杉山委員：今の話の中で言うと、1つの目標を決めて、そこに様々な年齢や障害の方を含めて、大会やイベントに行くという仕組みを作る。それぞれの障害の方が感じたことを実際に追いかけてパンフレットにするということは、時間がかかりますよね。

○牧野委員：実際の事じゃなくても、わかりやすく変換すればよいと思います。

○宮崎副主査：皆さんからいただいたメッセージは実際にあった出来事なので、例えば、ストーリーに絡めていくのもよいかと思います。

○牧野委員：何人かの困り事を一人の人のストーリーにすることにした方が、感情移入で

きて我が事と思えるかもしれません。

- 宮崎副主査：確かにいきなりメッセージが来るよりも、茅ヶ崎での出来事とすることで、みんながイメージできると思います。これが全く知らない街の出来事では中々理解できないと思います。今日お話しできませんでしたが、ターゲットの大前提は茅ヶ崎市民にしたいです。そこは、茅ヶ崎らしさなどを入れていきたいと思っています。
- 瀬川委員：役所の職員で、絵や漫画が上手い人はいますか。
- 宮崎副主査：絵が上手い人はいます。
- 牧野委員：車いすの話ならいくらでも作れますが、発達障害と精神障害の事だとパッと浮かびませんね。そういうエピソードをいくつか集めてできるとよいですね。
- 上杉委員：少しずれるかもしれませんが、昔、子どもが勝手に外出してしまい、北茅ヶ崎のラーメン屋さんに入ってラーメンを食べたが、お金を持っていなくて大騒ぎして電話がかかってきて、私が行って支払った、という一悶着があった後に、そのラーメン屋のご主人が、子どもがそこを通るたびに声をかけてくれるようになりました。
- 宮崎副主査：ストーリーに加えて、なぜそんなことがあったのかという説明を入れれば、気付きを与えてくれると思います。
- 斉藤部会長：エピソードやストーリーを各団体に色々出していただいて、それを元に、茅ヶ崎の特性や顔が見えるということを前提に、自分達が住んでいる場所でこういう事が起こっている、問題になるということを、改めて多くの市民に考えてもらい、感じてもらうような全体のストーリーを作る。印刷するだけでなく、その後、どのように使うのかということをお忘れしないで、活動していくことを考えていただきたいと思っています。表現の方ではイラスト、漫画という話もありましたが、分かりやすさが大事です。
- 牧野委員：思いつきですが、1枚のパンフレットやリーフレットを作るのではなくて、毎月、エピソードと実際の店名も入れて出したら、広告ではありませんが、商店街などのお店の宣伝にもなるし、儲かるという視点の方が、みんなに読んでもらえるのではないのでしょうか。親切にしてくれたバス等の運転手さんの存在が市民に分かるとか。
- 鈴木委員：点字のメニューが置いてありますか。
- 牧野委員：そうですね。メニューを読んでもらいましたとか。そういうエピソードを載せたら、うちの店でもやればよいと分かりますよね。
- 藤井副部会長：障害者自身が生き生きとしているというエピソードが欲しいですね。小学4年生の出前講座をやった時に「あれもできない、これもできない」と障害者が言い過ぎてしまい、「生きていて楽しいの？」という質問が出ました。その時は、「この人は学校まで車を運転してきたんだよ。君たちと顔を合わせるの楽しいんだよ」と言いました。そうしたら「運転できるんですか？」と初めて小学生は気付きます。障害者が自分で生活している中で、ここが困っているというストーリーはよいと思います。
- 牧野委員：こういうことをしてくれて嬉しかった、というエピソードは、なんで嬉しかったかという、普段は経験がないからです。みんながそうしてくれたら、それが当たり前の世界になりますよね。

- 鈴木委員：障害者同士で情報のやり取りをするから、あのお店はちゃんとやってくれるとか、広がっていきます。
- 上杉委員：私達が情報誌みたいですね。それも大事ですが、支援してくれる人は一体何をしたらよいかということを知りたいので、そこは外さないようにしたいです。
- 斉藤部会長：大体イメージできていますが、最終的にはどうやってまとめていけばよいですか。みんなでまとめてしまってよいですか。
- 宮崎副主査：正直なところ、このままこれで、といける段階ではないと思っています。みなさんからエピソードをもらって、それをどこで使うとか、みんなで1枚ものを配りましょうか、ということを考える必要があります。行政のどこかに置くということでは駄目であり、読んでもらうための工夫も必要になると思います。
- 上杉委員：例えば、民生委員の障害部会からとかはどうでしょうか。
- 牧野委員：「広報ちがさき」のワンコーナーはどうでしょう。それならリーフレットにしなくても、月に2回あり、まずは1年間エピソードを実名等で載せたらみんなに読んでもらえるのではないのでしょうか。
- 鈴木委員：今でも広報の中に福祉コーナーはありますよね。
- 宮崎副主査：毎回ずっと載っているわけではないと思いますが、その時々で掲載されています。
- 瀬川委員：茅ヶ崎というアカウントのFacebookは、誰がやっているんですか。
- 守瀬課長補佐：広報部門でやっています。広報ちがさきについて、何年か前に文化資料館の特集記事を通年で連載していたこともあります。広報紙も紙面の奪い合いのような状態になっているので、いきなりねじ込むというのは難しいところもあるかもしれません。例えば、1コーナーを少しだけもらうことはできるかなと思います。
- 関野委員：こういうものを作って、どうやって目にとめるかということが重要だと思います。いきなりバリアフリーとあっても、まず読まない。「なんだこれ」というかたちで読んでみようと思わせないと、読んでもらえないと思います。
- 瀧井委員：一度に配るのではなくて、必要な時に必要な分だけ貰いに行くなど、最初の時点で1万部を置いておかなくてはいけないのですか。
- 守瀬課長補佐：1万部を置いておくことは問題ありません。
- 宮崎副主査：個人的には近所にポスティングでもよいと思っています。
- 牧野委員：ポスティングじゃなくても、広報ちがさきに挟み込みのようにすれば、全戸に行くのではないのでしょうか。
- 宮崎副主査：駅前で配るという方法もあるでしょうけど、中々みなさん取ってくれません。
- 上杉委員：この大きさだと取ってくれないですね。もっと小さくないと。
- 関野委員：1回で見えてくれないでしょうから、何回かに分ける。1回にお金をかけてものを作るのではなくて、1枚裏表のものであれば、1枚1円くらいですよ。その方が効果はあると思います。先ほどのストーリーのようなものだったら、続くような気がします。
- 宮崎副主査：色々と伝えたい内容は1枚に納まるものでもないでしょうし、かと言ってリーフレットにしたら読んでもらえない。今回で終わりではなくて、来年も再来年も継続してやっていくのが重要なのかと思います。

- 齊藤部会長：ここの議論は、1回でやるというのは有り得ないと思います。繰り返していくと、また来たか、今度は何が来るのか、となるかもしれないです。
- 牧野委員：人間は、情報がいっぱいあると必要なものしか求めませんよね。バリアフリーと言われても、関係ないと思ったらそこでシャットダウンしてしまう。けれど、おいしいお店の情報なら自分に関係してくるから見るのではないのでしょうか。車いすトイレの情報は普通の人には必要ないかもしれませんが、親が車いすとか、自分が怪我した時は役に立ちます。お店の人は宣伝してもらえて嬉しいので、そういう方向から攻めていった方がみんなに見てもらえるかなと思います。
- 関野委員：正直に言うと、市の広報紙より、タウン誌の方が読むと思います。
- 柏崎委員：老人クラブでサロンを実施しているが、そこでは何か議題を持ってきて、みんなで話し合います。そういう意味で言うと、パンフレットを配るだけではなくて、事例をいっぱい載せると、話し合いで頭に入ります。配るだけでは効果がないから、その問題についてみんなで話すということを、どこかの集まりでやるとよいと思います。これをネタにして話を続けていく。
- 浅川委員：電車の中吊り広告はよく見られるので、こういうものはどうでしょうか。お金はかかるとは思いますが、写真やポスターにしたら見られるのではないのでしょうか。
- 齊藤部会長：見やすく、分かりやすくということですね。
方向性の理解は大丈夫でしょうか。そうしたら、色々なエピソードやストーリーを出してもらって、できれば「読ませる」「定期的にしつこく出していく」ということがあるので、楽しんでいるけど困っているストーリーというものを提供していただきたいと思います。定期的に出して、それを説明をするということを念頭に置きながら、作成していく。各団体の方は、日頃あるいはイベント時のストーリーを事務局に提出してください。
- 守瀬課長補佐：来年度以降も続いていく活動になりますので、このようにアイデアを出していただいてイメージやキーワードも決まってくるとと思いますので、引き続き、活用方法に関しても議論を一緒にしていきたいと思います。行政側は堅くなる方向に行きやすいので、実際にどうやったら受け止めやすいのか、という話を教えていただければと思います。行政は4月はじまり3月終わりのサイクルで動いていますが、レベルの低いものを作っても仕方がないので、次もぜひ議論していただければと思います。
- 齊藤部会長：3週間くらいかけて、ストーリー等を出していただけますか。
- 牧野委員：メールで送ればよいですか。
- 宮崎副主査：市の方に送っていただければと思います。まずはこれまでにあった一番身近な情報をいただければと思います。
- 守瀬課長補佐：今月中に一旦いただいて、追加でまたいただければ対応できるかと思いますが、お願いします。

4. その他

- 齊藤部会長：次回は3月でよろしいですか。

○宮崎副主査：全体の会議が、3月25日（月）にありまして、時間は15時からになります。
会場は本庁舎4階の会議室1です。前回の協議会と市民部会をした会場になります。

5. 閉会

○斉藤部会長：それでは予定が全て終わりましたので、これで終了します。
ありがとうございました。

部会長署名 齊藤 進 _____

部会員署名 藤井 直人 _____